「世界の母と子の命を救うホワイトリボン」の講演内容

講師：ジョイセフ理事・国際協力推進部長　高橋秀行

第 1 回講演日：2008 年 10 月 6 日（月）
場所：横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ
開催：国際ソロプチミストアメリカ日本東リジョン
　　2008~2010 年期　第 1 回 C 地区研修会

第 2 回講演日：2008 年 10 月 9 日（木）
場所：ホテルニューオータニ（東京）
開催：国際ソロプチミストアメリカ日本東リジョン
　　2008~2010 年期　第 1 回 AB 合同地区研修会

＊＊＊

ご紹介頂きました財団法人ジョイセフの高橋です。私はこのように大勢の女性の前でお話しをするのは生まれて初めてのため大変に緊張しております。これからホワイトリボンについてお話しをさせて頂きます。

ホワイトリボン・アライアンスは 1999 年に設立され、現在 110 カ国から 620 以上の団体が参加をしています。ジョイセフは 2002 年にホワイトリボンに参加をし、日本でホワイトリボン活動を推進している中心的な役割を負っています。ジョイセフは、1968 年に設立されました日本生まれの財団法人です。

ホワイトリボンを取り巻く妊産婦保健の現状についてお話し申し上げます。世界では１分に一人の女性が今でも命を落としております。私どもはこの１分に一人という数字を非常に重く受け止めております。その理由は、妊娠や出産は病気ではないからです。途上国ではマラリアやその他の感染症で多くの人が亡くなっています。これらは病気です。しかし、妊娠と出産というのは女性にとって病気ではなく全く普通のことです。それでなぜ命を落とさなければいけないのかという素朴な疑問です。妊娠をして出産をすることは、女性がこの世に命を産むことです。命を生む女性が、新しい生命を産むときになぜ命を落とさなければいけないのかという思いです。このようなことがあってはいけません。妊娠と出産に係る女性の命を救うということは、人間にとっては責務であり、当たり前に取り組まなければならないことだと考えます。
１分間に一人という数字は、500 人乗りのジャンボ機が３機、毎日墜落しているということ

に相当します。飛行機事故で死ぬと大きなニュースになるけれども、妊娠や出産で死んだらニュースにならない。これは変なことです。私どもは、もっとこの現実に目を向けなければいけません。命が助かっても、年間 2,000 万人の女性が疾病で苦しんでいます。１年未満の子どもたち・年間約 1,000 万人が、命を落としています。その内の 40%は１か月以内に亡くなっています。お母さんの命を救うということは、赤ちゃんの命を救うということと表裏一体です。同時に、お母さんの命を救うことは家族を救い、地域社会も助け、非常に大きな波及効果があります。

妊産婦死亡の数値について少しお話します。この数字は出生 10 万件に対していくつかという統計です。日本は出生 10 万に対して日本は 4.9 です。開発途上国の平均は、出産 10 万件に対して 450 です。この数値は、約 100 年前の 1899 年の日本のです。

アフガニスタンの妊産婦死亡は出生 10 万件に対して 1,900 です。世界で２番目に高い数字です。ジョイセフはアフガニスタンでお母さんと赤ちゃんの命を救うという活動に力を入れています。私は 2002 年４月にアフガニスタンに行きました。案内をされた所は、23 年間の内戦の激戦地で数百万個の地雷が埋まっていた東部のナンガハール州でした。歩く時は地雷を踏まないことを祈りました。そこで、破壊され尽くされた現場を見てどのように支援をしたらいいのだろうか考えました。余りにもひどい光景にむしろ、「よし、それならやってみよう」という気持ちになりました。アフガニスタンはイスラム教の戒律が厳しい国です。母親が自分の意思で医者に一人で行くことはできません。夫の事前の許可が必要です。病院の医者が男性の場合は、女性は異性の医者の診察を受けることができません。

お母さんが亡くなると、家庭や地域はどうなるのかということを少しお話しいたします。ＷＨＯ本部から頂いたデータがあります。一家のお母さんやお父さんが生きていても生活苦や事故で子どもは亡くなります。父親が亡くなると、男の子の死亡は 1.1 倍になり、女の子の死亡は 1.3 倍に上がります。母親が亡くなると、男の子の死亡は 2.8 倍になり、女の子の死亡は 4.6 倍に上がります。お母さんの力がいかに大きいかを示しています。

途上国の妊産婦死亡は社会的にどのような影響を与えるかを申し上げます。母親が亡くなると、家庭はガタガタになり崩壊します。お母さんが亡くなると、お父さんはお母さんの代わりに子どもの世話ができません。私はアジア・アフリカのいくつかの国を見ましたが、お母さんが亡くなると、残される子どもは５人、６人です。アフリカの農村に行きますと 10 人から 15 人です。15 人の子どもを父親一人では支えられません。そしてお父さんは夜こっそりとどこかに逃げてしまいます。残された子どもは親戚に引き取られ、また地域社会で一時的に預かります。時には、「どうしようもないね」と言って、子どもたちはうやむやにどこかに消えてしまう場合もあります。お母さんが亡くなると、子どもたちが最も被

害を受けます。母親が亡くなると、世界で年間 70 万人のストリートチルドレンが発生しています。家庭の崩壊から、更に地域社会がガタガタになり崩れます。子どもたちは教育を受ける機会を失います。その子どもたちが大きくなっても就職できません。すると社会不安が起きます。そして、国自体を大きく揺さぶります。このような連鎖反応がおきます。ですから、お母さんの命を救うということは将来への大きな社会的投資でもあります。

では、お母さんはどうして亡くなるのだろうかという原因について少しご説明します。例えば妊娠と出産にかかわる中で、栄養失調や栄養不良が理由の一つです。途上国の家庭は、１日３食の食事はありません。平均１日２食です。２食でも、１食がスープであり、お茶１杯を１食に数えます。食事といっても、パン一切れであり、とうもろこしの一種であるメイズをちょっと口にするだけです。また多くのアフリカ、アジアの貧しい地域では、一家で食事をするということは稀です。まず家の夫が先に食べ、そして子どもが食べ、最後に残り物を母親が食べているという習慣があります。それで妊娠、出産をする。「栄養が必要です」と言っても、残り物を食べてどのように栄養を摂るのかと言いたいのです。

途上国では出産はいまだに不浄なものだと考えているところが多くあります。日本も昭和初期まであったようです。陽の光が当たらない暗い納屋で出産をする。そして１週間、ほとんど食事も食べないでいる。そして、ひっそりと命を落とすお母さんと赤ちゃんが多くいます。

医者に診てもらうことができない母親が多くいます。理由は、自宅から病院まで距離が遠い、お医者さんに払うお金がないからです。女性の社会的地位が低いために医者に行くことを必要と思わない地域もあります。私どもは、このような現実に、１枚 1 枚ゆっくりと皮をはぐように腰を据えて取り組んでいます。

ジョイセフは日本の経験を大切にしています。日本の母子保健の経験は「世界の宝」といわれています。それは、日本は戦後、短期間に出生力を落とし、妊産婦死亡と乳幼児死亡を下げた国です。この日本の経験を途上国に移転しようと、私どもは努力をしています。世界の妊産婦死亡率の 70%は救える命といわれています。やろうと思えばできるのです。しかし成果が挙がらない。そこに世界の現実と壁があります。

その現実の一つをご紹介します。１年や２年の取り組みで持続的にお母さんと赤ちゃんの命を救うことはではできません。世界の援助はどうかというと、短くて半年から１年、通常で２年から３年の援助が普通です。外部の援助機関から資金をもらって活動をすることは大変結構だと思っています。しかし、「お金の切れ目が縁の切れ目」という言葉が世間にありますが、援助資金の切れ目が援助の切れ目になっています。そしてお母さんや赤ちゃ

んの命を救うプロジェクトが、お金の切れ目で停止します。このような援助を続けている限り、世界のお母さんや赤ちゃんの命は救えないのです。ですから中長期な支援をする。同じことの繰り返しをするわけではありません。世界の妊産婦死亡率が過去 20 年間変わらないということは、その答えは関係者が分かっています。現在の世界の援助システムはそうはなっていないのです。この壁をぶち破ろうとしているのが、ホワイトリボンです。短期の援助ではなく、参加する団体や個人が手をつないで、中長期的に息の長い支援をしようというのがホワイトリボン精神です。

国連機関が発表している世界の妊産婦死亡の原因があります。1 番目に妊娠と出産にかかわる出血です。2 番目が感染症です。その統計自体は間違いありません。しかし途上国の現実を見たとき、医者の診断書に理由はあってもその先に何かあるのではないかと思っています。それは「手遅れ」です。急患の妊産婦が病院に行こうとしても自宅から片道、10 キロ、20 キロを歩いて行かないとお医者さんにたどり着かない現実です。普通に足で歩いても、数時間はかかります。病気になったお母さんは歩けません。ですから手作りの担架で、村人４、５人が棒で担いで行きます。４、５時間はかかります。その結果、道の途中で命を落とします。これが死亡原因として統計には載らない手遅れではないかと思っています。ですから、ジョイセフは自治体や支援団体や企業と協力をして駅前の放置自転車を再生して途上国に贈り、お母さんと赤ちゃんの命を救うために自転車を利用しています。

途上国には人口保健調査報告書の多くのデータがあります。例えば、アフリカのタンザニアでは、女性の 36%が、「病院に行こうと思っても、距離が遠すぎて行けません」と答えています。タンザニア全国の３分の１の女性が、「家から距離が遠い」ことを理由にしています。また貧しい女性の 52%が、「病院に行こうと思っても、距離が遠くて行けません」と答えています。二人に一人が、「距離が遠過ぎる」と言っています。また約 40%の女性が、「病院に行こうと思っても、バス代など交通費が高くて払えない」と答えています。バス代は片道約 100 円です。私どもにとって 100 円は大きな金額ではないかもしれません。しかし一家の年収が１万円に満たない家庭には、100 円は家族全員が１日を暮らすお金です。つまり、自分が医者に診てもらえば、その日は家族が食事を口にすることができない現実があります。このように、緊急に医者に診てもらおうとしても、貧しい村人にとって、自宅から遠く離れた病院に行くまでに大きな壁があります。

2007 年 10 月、ロンドンでウーマン・デリバーという国際会議が開かれました。世界 100 か国以上から約 2,000 名の各国代表が集まり、なぜ世界の妊産婦死亡率が下がらないのかという会議が行われました。ここで改めて一つ大きな話題になったのが、妊産婦保健の課題は保健だけではないことでした。お母さんが亡くなっている理由は、極度の貧困、女性が初等教育を受けられないために読み書きができないこと、女性の社会的地位が低いこと、

あるいは感染症などが妊産婦保健に凝縮しています。その取り組みは難しく時間がかかります。見方を変えると、お母さんの命を救うことは波及効果が大きいのです。

私どもはこのような観点から、ホワイトリボン運動を進めております。なぜ運動かという点ですが、一人ひとりが手をつないで協力をしましょう、活動が途切れないようにしましょうということです。国際ソロプチミストは、女性の地位向上、万人の人権、平等、開発、平和を掲げています。ホワイトリボン運動と国際ソロプチミストの活動は表裏一体と考えています。

先ほど、ホワイトリボン・アライアンス会長のテレサ・シェイバーさんのお話がちょっとございました。私が今日ここで講演をすることと、10 月 6 日もソロプチミスト研修会でお話をしたことをテレサさんに連絡をしました。そして昨夜、返事がありました。「それは大変素晴らしいことだ。自分がアメリカで助産師の資格を取ったのは、ソロプチミスト・サンフランシスコの支援のお蔭です。」とありました。テレサさんは、「1980 年から 1983 年までの４年間、アフリカのモーリタニアに行き、アメリカの平和部隊の一員として活動しました。現地の村で赤ちゃんの世話や母親の出産介助をしていました。そこで自分は何とか助産師の資格を取って、世界中のお母さんの命を救いたいと思いました。その希望を後押ししてくれたのがソロプチミストです。あなたは日本のソロプチミストに講演をする機会を得たのだから、私の感謝の気持ちを伝えて欲しい。」という伝言を預かりました。ホワイトリボンには、一人ひとりの立場は異なっても、お互いが手を繋げば大きな力となり、社会を変えることができるというモットーがあります。

今年の７月、ホワイトリボンに関連してジョイセフは一つの活動を行いました。イギリスのブラウン首相のサラ・ブラウン夫人と、福田前首相の福田貴代子夫人をお招きして、イギリス大使館でホワイトリボンの活動をアピールしました。この場で、サラ・ブラウン夫人から一つのエピソードが披露されました。「世界では母親が出産に臨む際に、『再び家族に会えないかもしれない』、と言葉を残して出産をする地域がいまだに多く残っています。このような地域を一つでも減らしましょう。」と呼びかけました。ホワイトリボンは、妊娠と出産で亡くなった世界の女性に哀悼の意を示すとともに、その悲しみを乗り越えて、人と人が手をつないで、一人でも多くの命を救う明日への希望を表します。ホワイトリボンは、明日への希望を世界に広める運動です。

ジョイセフは 1988 年から今までに、途上国 90 か国に 5 万 7,000 台以上の再生自転車を地方自治体、協力団体・企業と組んで世界のお母さんと赤ちゃんの命を救うために贈ってきました。私どもが贈っているのは自転車というモノではなく、途上国の地域と人々に希望と励ましを届けていると思っています。

日本には沢山の自転車があります。途上国に送っている自転車はママチャリです。ママチャリは「世界の宝」です。今、「ママチャリは世界の宝だ」と申しましたら少し笑いが起きましたが、私は大まじめです。中国製やインド製の自転車は、女性が自転車に乗ることを想定して製造していません。女性がスカートをはいているとか、腰に布を巻いていることを想定して自転車を作っていのは日本だけです。多くの途上国では、女性が自転車に乗る文化がないのです。途上国では女性が自転車に乗ると、「なんで女性が自転車に乗るのだ」という声が起きます。日本の自転車はママチャリですから、「ママさんが乗る自転車ですよ」と言って、世界各地に送ります。「しかもこの自転車は、お母さんと赤ちゃんの命のために使う自転車です」と指定します。村長さんや地域の有力者の許可を得ます。そして、たとえ貧しくても、積極的に活動している母子保健ボランティアに届くわけです。途上国では、再生自転車が命の足、二輪救急車、神様の贈り物と呼ばれています。再生自転車に乗り女性が社会で活躍すると、女性の社会的地位の向上にも役立ちます。

ジョイセフは、日本の小学生が使い終わったランドセルを関連する企業や団体の協力を得て、アフガニスタンの子どもたちに贈る活動をしています。ランドセルと母子保健がどのように関係しているのかをご説明します。アフガニスタンの女性の 80%は読み書きができません。それは過去 23 年間の内戦があった時、当時の政権は女性が教育を受けることを否定しました。そのため、今でも農村地域の女性は多くが非識字者です。お母さんや赤ちゃんの命を救う活動を呼びかける母子保健のパンフレットやポスターなどの印刷物を配り説明をしても、適切に理解してもらえません。自分や家庭や社会を知る上で読み書きは不可欠です。アフガニスタンの貧しい農村では、小学４年生から５年生になると女生徒の約２割から３割は中途退学をします。10 代前半の年齢で半強制的な結婚をする女性が多くいます。貧しい農民にとって自分の娘を早く結婚させると、相手の男性から牛 100 頭とか羊 200 頭など家畜を多くもらうことができる経済的な理由があります。小学校を卒業する女生徒は少ないのです。そして 10 代で妊娠をして出産をすると、妊婦としての疾病や死亡率のリスクが高まります。

ですから、日本の支援者からアフガンの子どもたちにランドセルを贈ることは、小学校をきちんと卒業してください、読み書きを習ってください、世の中をもっと理解してください、そして自分の将来を考えてください、という願いがランドセルには込められています。これもジョイセフが、世界で 2 番目に高いアフガンの妊産婦死亡率と乳児死亡率を下げる中長期的な取り組みの一環です。ランドセルを現地の子どもたち一人ひとりに手渡すことは、子どもだけではなく、家庭や地域社会も、基礎教育が大切ということを分かってもらうための社会の雰囲気づくりと日本の支援者からの温かい励ましです。

ジョイセフはベトナムでも活動しております。先ほどもお話しましたが、多くの途上国で

は援助資金の切れ目が援助活動の切れ目になっています。この繰り返しでは、母子保健事業の効果が発揮できず、多くのお母さんや赤ちゃんの命を救えません。そこで私どもは、地域で母子保健ボランティアさんとして活動している村人にマイクロクレジットと呼ばれている無担保小口融資を提供しています。不動産や金銭の担保は要りません。私どもが欲しい担保は、女性のやる気なのです。ベトナムのプロジェクトでは返済が滞ったことはありません。100%の返済率です。これによって、外部からの資金が切れても、地域に密着した母子保健活動を自力で続けることがでる社会的な基礎作りができました。貧しい農村でも村人は自分たちの努力と創意工夫で何とかできるという自信を得たことは、無形の大きな財産であると思います。ジョイセフの国際協力は決して大きな規模ではありませんが、今日の国際援助が抱えている課題を少しでも乗り越えるように努力をしています。

私どもは、小さなことでも着実に積み上げ、継続した活動を行いたいと考えております。皆様方のご支援に改めて御礼申し上げます。ご清聴ありがとうございました。